

1. 美濃国の地名変遷に見る村国氏の活躍

三野国各牟評〇〇里
 御野国各牟郡〇〇里
 美濃国各牟郡〇〇里
 美濃国各務郡〇〇里



1. 地方行政単位の変遷
 (律令国家体制の骨組)
 国-評-里 → 国-郡-里
2. 漢字表記の変遷
 三野 → 御野 → 美濃
 各牟 → 各務

・ 689年 「淨御原令」
 律令国家体制の骨格形成

国造の支配領域を分割して
 評 (コオリ/ヒョウ)
 評の上に
 上級地方行政単位
 としての国 (クニ/コク)
 評の下に里 (サト/リ)

・ 699年 藤原宮跡出土木簡
 「己亥年九月三野国各牟(評)・・・」
 「汗奴麻里五百木部加西俵・・・」
 ⇒ 三野国各牟評汗奴麻里

国-評-里(50戸)制



699年
 己亥年九月三野国各〇〇
 汗奴麻里五百木部加西俵
 (鵜沼)

【貢進物荷札】 藤原宮跡北面中門地区

己亥年九月三野国各牟評汗奴麻里
 五百木部加西俵



各牟評汗
 汗奴麻
 (鵜沼)

【貢進物荷札】 石神遺跡

699 年木簡「三野国各牟評汗奴麻里」

国-評-里制

青野（大垣市青野）
大野（揖斐郡大野町）
各務野（各務原市）
※俗説的

701 年「大宝律令」

律令体制を法的に完成 国-郡-里制

702 年戸籍「御野国各牟郡中里」

壬申の乱における三野の役割が想起されるなか、国司の申請に基づいて国名表記が「御野」に改訂
--

707 年『続日本紀』に美濃国司の表記

村国連等志亮（としめ）の多産褒賞を報告
708 年（和銅元）「和銅元年戸籍」以降、美濃の国名用字が定着

※村国氏の活躍による美濃国の注目

713 年 『続日本紀』の和銅六年五月二日の条

「諸国郡郷名著好字」令

（諸国の郡・里名を二字の好字に改訂・定着することを命ずる）

各牟→各務 中→那珂

715 年 靈龜元年式 行政組織の改訂 国-郡-郷-(里) 制 2~3 の里→郷（さと/ごう）

美濃国各務郡那珂郷

那加

2. 村国氏の拠点はどこに

- 931~938 年 『和名類聚抄』

源順（みなもとのしたごう）が編纂

美濃国各務郡

村国郷（ムラクニ）

大榛郷（オオバリ）

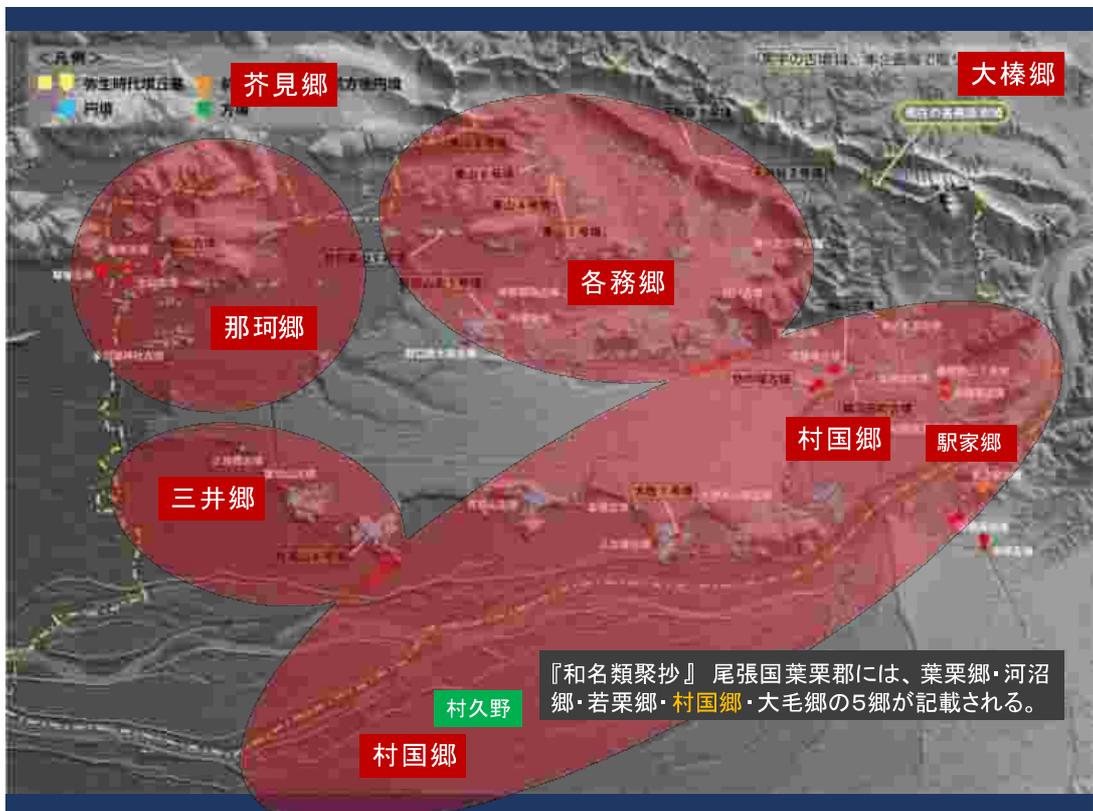
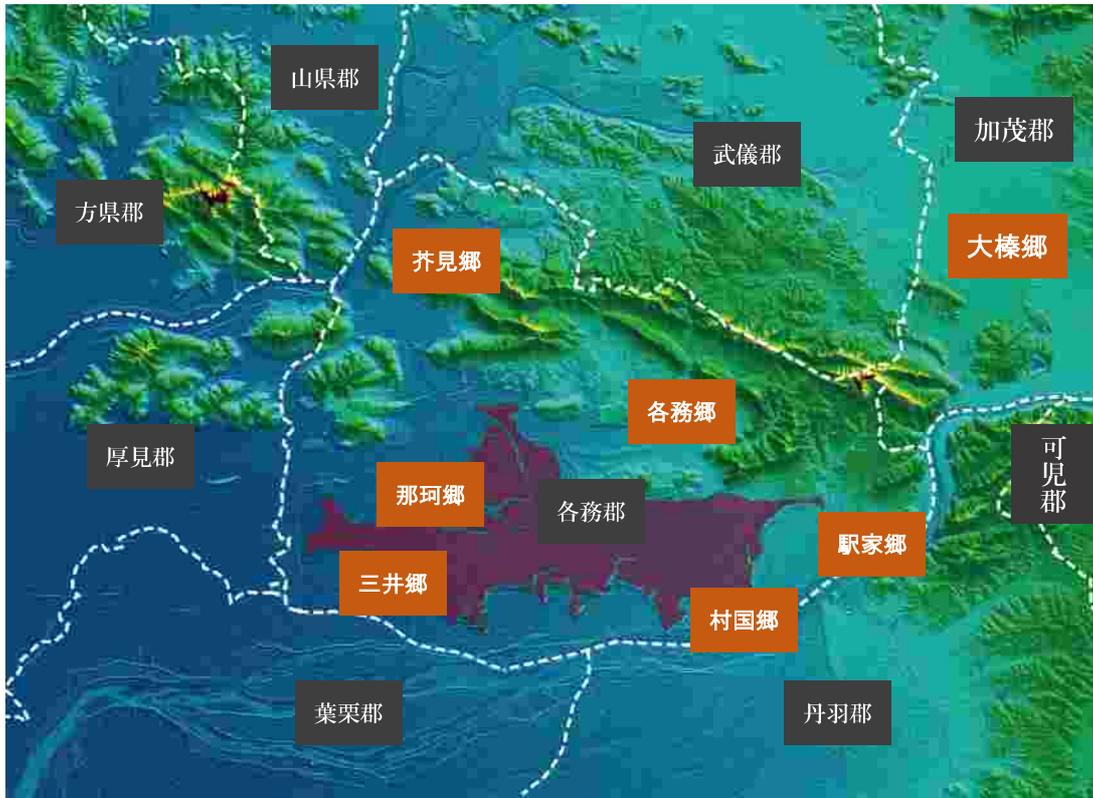
各務郷（カカミ）

那珂郷（ナカ）

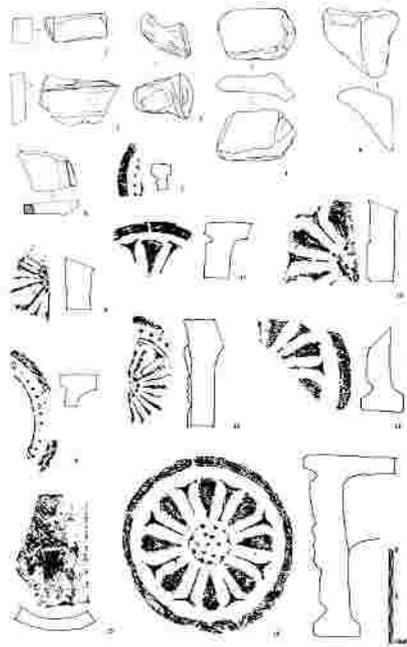
芥見郷（アクタミ）

三井郷（ミイ）

駅馬郷（ウマヤ）



音楽寺出土瓦



音楽寺出土刻書瓦

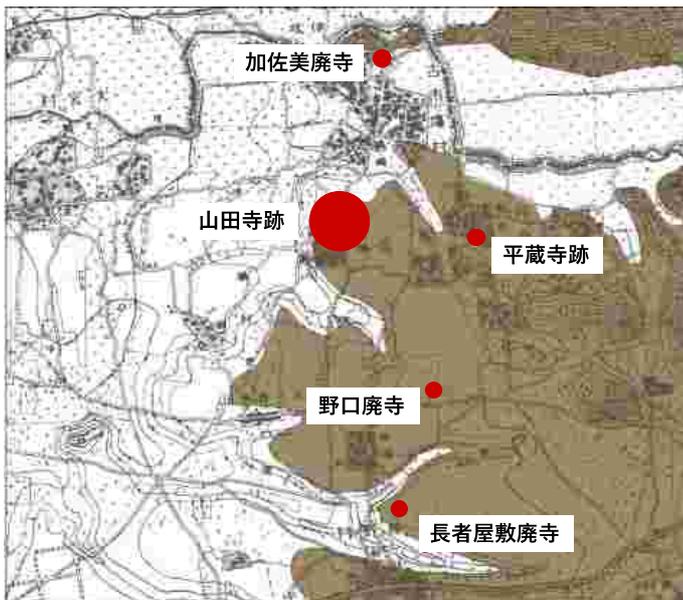


(美)濃國

3. 各牟郡における古代寺院の連立

壬申の乱功勲による優遇措置（減税）は、701年の大宝律令でリセットされ有位農民は公民へ。郡の官寺として山田寺に集約される。

官寺・官衙への発展



7世紀後半に廃寺

- ・加佐美寺
- ・平蔵寺
- ・野口寺
- ・長者屋敷寺



(官衙の形成)
8世紀初頭 大宝律令

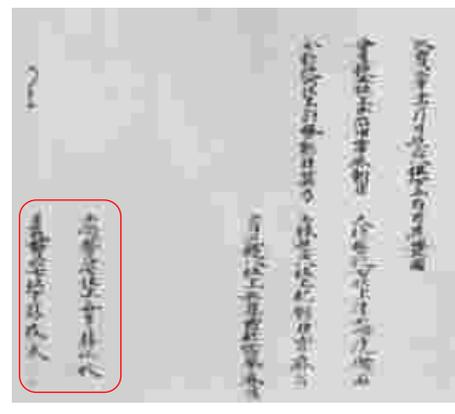


9世紀末に廃寺
・山田寺 (官寺)

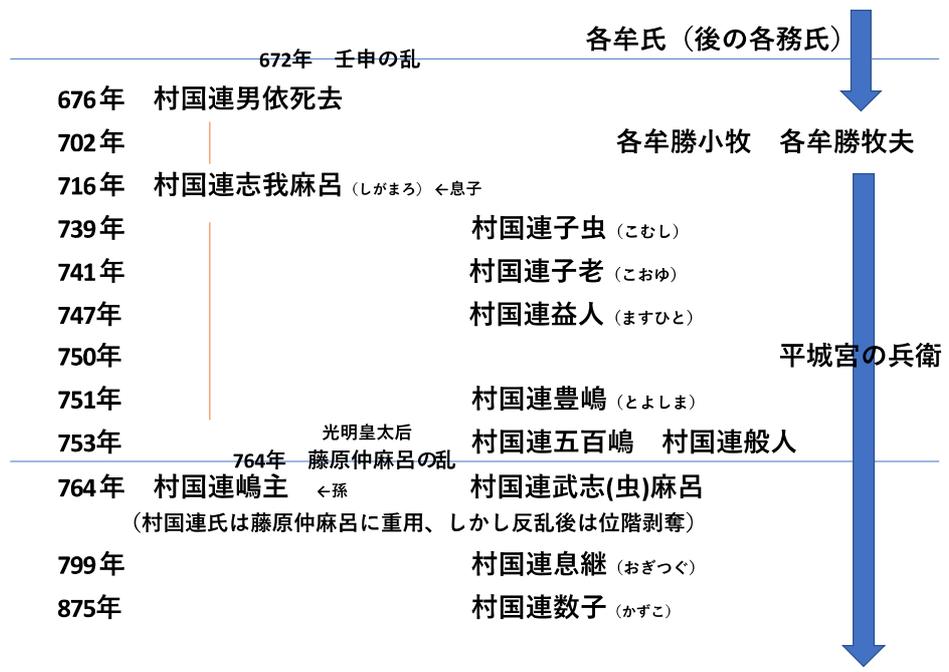
4. 村国連氏と各牟勝氏

彼らの位階は他の郡司クラス一般が帯びたものより高い 中央から派遣された国司と同等
壬申の乱の功勳によって授けられたものか

戸籍作成責任者
 小領務正七位上 各牟勝小牧
 主帖務正七位下 勝牧夫



大宝二年戸籍



村国連氏は・・・

在地の豪族。壬申の乱における村国男依の活躍により、多大な論功・行賞を得て、中央の下級貴族氏として進出した。

しかし、恵美押勝の乱後、藤原仲麻呂に加担していたことで、下級官人へ後退していった。

各務勝氏は・・・

百済系の渡来人、各牟勝氏は、各牟評に本拠地を占めていたが、村国男依らの呼びかけに応じて壬申の乱に参戦。『日本書紀』や『続日本紀』には登場しない無名兵士。

その軍功によって高い冠位を授けられ、その後も、在地の郡司として地歩を占め続けていった。

村国連氏の中央進出
(下級貴族)

大和国添下郡村国郷
そうのしも

各務勝氏の在地定着
(郡司)

美濃国各務郡村国郷

まとめ

1. 美濃国の地名変遷に見る村国氏の活躍

三野から美濃へ、そこには壬申の乱以後の地位向上が垣間見られる。この地域が律令国家体制の進展のなかで、地方支配の要であったことへの配慮か。

2. 村国氏の拠点はどこに

木曾川を挟む美濃国と尾張国の国境付近に位置。美濃国が尾張国の一部を取り込んでいた可能性がある（美濃国各務郡村国郷と尾張国葉栗郡村国郷）。

3. 各牟郡における古代寺院の連立

壬申の乱の論功行賞により、各牟郡の農民兵士たちは冠位、免税を受けたほか、寺院建立によって権威を象徴した。しかし、大宝律令による一般公民化で、官寺となる山田寺以外は短期間で消滅した。

4. 村国連氏と各牟勝氏

村国連氏は中央へ進出したが恵美押勝の乱を切っ掛けに衰退、在地した氏族も消息は定かでない。一方、各牟勝氏は地方に居留まり勢力を拡大していった。

講演内容については、以下の文献を参考にさせていただきました。

野村忠夫『各務原市史』第七章 第二節 律令国家の展開と各務郡 1986年

小川貴司『古代地方都市の成立』2004年（プレゼン中における平蔵寺出土土瓦の図版）